



2008年10月31日  
第20号

# 岡山大学工学部 同窓会報

編集・発行 / 岡山大学工学部同窓会事務局  
〒700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学新技術研究センター内  
TEL・FAX (086) 255-8311  
メールアドレス ofst@cc.okayama-u.ac.jp  
ホームページ(URL) <http://www.eng-okayama-u.ac.jp/alumni/index.html>  
印刷所 / 小野 高速印刷 株  
〒670-0933 姫路市平野町62 ☎ 079(281) 8837

## TOPICS

挨拶(工学部長、退職者)	1~
学科近況、職場紹介	9~
新任・昇任・退職等教員、 叙勲者紹介	14
受賞研究、学位取得者 名簿	15~
会計報告、広報等	18~

## 「国立大学法人岡山大学にも評価の波」

工学部長 野木 茂次



全国の国立大学が独立行政法人(国立大学法人)となって4年半が経ちました。各法人は6年間を一つの区切りとし、この間の目標(中期目標)と計画(中期計画)を作成し、その方向に沿って研究・教育・管理運営を進めることになっています。

各中期の終わり頃には、その中期での教育研究の特に質的な状況と中期目標の達成状況についての評価が行われることになっており、これらの評価を反映させて各大学で作成した次の6年間の中期目標をも併せ、総合的に判断して、次の6年間の運営費交付金(国から大学へ毎年交付される教育研究経費)の額が決めることになっています。昨年の末から今年の6月にかけて相当の時間を費やして、これらの評価のための報告書を作成し、文部科学省に提出しました。10月下旬には、評価機関からの実地調査が行われることになっています。

一方、国立・公立・私立のすべての大学が、大学教育として社会的に要求される質・レベル以上の教育を行っているかどうかを、大学評価・学位授与機構が7年毎に評価(大学機関別認証評価)することになっています。この評価をクリアしないと大学としての存続が難しくなります。この大学機関別認証評価については、今年の3月末に結果が出され、岡山大学は高い評価を得ました。

岡山大学では学内の教員に対しても昨年からの、教育・研究・管理運営・社会貢献の各領域での実績について評価を行い、その結果を昇給・ボーナスに反映させることを行っています。このような評価は岡山大学が全国の国立大学の先駆けとなって実施しており、「評価の岡山大学」とも呼ばれています。

いろいろな組織に対して各種の評価を行うことは

時代の流れですが、「評価疲れ」と言える状況も現れています。評価を将来どのように生かすことができるかが重要と思っています。

昨年にも書かせて頂きましたが、入学試験での工学部志願者の減少は依然として深刻です。8月18日発行の日経ビジネスでは「さらば工学部」という衝撃的なタイトルで特集号を組んでいました。その中で、東京大学で理科1類(工学系と理学系)として入学した学生を、2年の終わりに学部・学科への振り分ける際に、工学系を選ばない学生が急増し、最近できた転学部の制度を利用して理科1類から経済学部への大量流出が生じていることが報じられています。大学の工学部の不人気に危機感をもち、企業内の技術者教育に知恵を絞っている製造業の例も挙げられています。全国の国立大学の工学部長会議では、高校生やその保護者に対して工学部の重要性をアピールするために、一般的関心の高い「環境」をテーマとする工学フォーラムを9月初めに開催し、その内容と各大学の工学部の広告宣伝を9月末の読売新聞全国版で大々的に行うことになっています。岡山大学工学部でも、高校生に魅力的な工学教育を目指して、これまで以上にダイナミックな改革を行おうとしています。

工学部では建物の平成17年度から大改修がなされていましたが、今年の3月までに、工学部1号館(旧、工学部本館)、2号館(旧、合成化学科棟)および3号館(旧、電気電子工学科棟)の改修が終わり、大変美しく機能的となり、トイレにもウォシュレットがつけました。

卒業生の方々から、在学生に対して企業などでの仕事の状況などを話していただくことは、学生のモチベーション向上やキャリア・サポートのためにも非常に有効であるようです。同窓会の諸氏にはいろいろな機会にコンタクトして頂き、引き続き工学部へのご支援を賜りますようよろしくお願い致します。

# 退職にあたって

## 退職にあたって

鷺尾 誠一



今年3月に定年退職しましたが、その後すぐ4月から中国職業能力開発大学校に働く場を与えられたため、新しい仕事への対応で時間を取られ、大学を離れた感慨に浸ったり、勤めた日々を振り返ったりする余裕もなく過ごしてきました。今回同窓会報に何か退職について書くよう要請されたのを機会に、岡山大学での仕事を多少なりとも振り返り、併せて遅まきながら機械系学科同窓生の皆さんへの退職ご挨拶とさせていただきます。

私が新設の応用機械工学科に採用されて岡山大学へ赴任したのは昭和57年8月でしたが、少し前まで京都大学工学部機械系学科で一緒にさせていただいた阿部先生、濱本先生、小西先生が既に同じ学科に教授として赴任されており、私は小西教授に呼んでいただいてその研究室の助教授としてこちらに来ました。応用機械工学科自身が新しく作られた学科であり、また小西研究室もその年度初めからスタートしたばかりであったため、当初は配属された4年生が4名、部屋はあっても机も椅子もないという状態でした。しかし所帯が小さい分纏まりがよく、何も無いところから研究室を立ち上げるという仕事に、学生も教員も協力して取り組むという熱気に満ちていました。当時私もまだ若く、1期生達は皆個性的でしたから、仕事を終えると飲み会といった雰囲気の中で、色んな話ができて、また地元の情報を教えてもらうなど、楽しい時間を過ごした事を今でも思い出します。

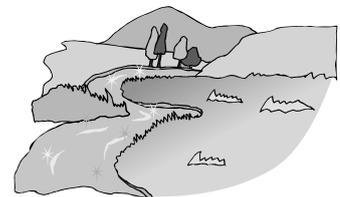
以来25年余り、自然科学研究科の設置や学科の改組など色々ありましたが、私は最後まで機械工学科に関わらせていただき、学生諸君を対象に講義をし、研究室に迎えた4年生、修士、博士の学生諸君と共に研究をするという日々をずっと過ごしてきました。授業をするという立場からは、自分が決しているいい教師でないことは自覚していましたが、講義内容を自分自身が本当に面白いと思ひ、だからこそ伝えたいという気持ちを持つこと、そして少なくとも自分の実感から外れたことはしゃべらないことをモットーにやってきました。授業に対する自己評価は、なんとか60点でぎりぎり合格ぐらいかなと思っていますが、学生さんからは色々批判も貰いましたし、本当のところは自分でも判断できません。確かなことは、もっと分らせるような

講義をして欲しかったという諸君が少なからずいたことで、その人たちに対してはこちらの技量の不足を申し訳なかったと思っています。

教授になってからは、良い教師でもない私がひよんな巡り会わせて教育評価の仕事に一度ならず関わることになりました。たまたま工学部の教務委員長になったときに工学部の授業評価アンケートを手がけたのが始まりで、その後教育開発センターに関わって全学の授業評価アンケートを立ち上げ、全国規模の工学教育プログラム検討委員会に参加し、はては岡山大学の個人評価システムを作るときに教育評価を担当する羽目になった、という具合です。こうした仕事は自身を顧みていつもある種の後ろめたさを伴うものですが、授業評価アンケートでは自分が学生なら授業の密室性がいやだな、教える身としては教師が裸の王様になるのはよくないなという実感を支えに、また教育の個人評価では大学教員が行う教育は、研究に比べてやった仕事を振り返る場がないな、第三者として眺める作業が為されていないなという問題意識を支えに取り組みました。ただ教育評価は、やりようによっては教える側の個性や自主性を殺すやもしれず、角を矯めて牛を殺す結果となる恐れがあることは、十分注意が必要だと感じました。現在実践技能教育を特色とする中国職業能力開発大学校で校長という管理職にある身としては、岡山大学で得た教育評価に関わる数々の経験をどう生かせるのか、それが問われると思っています。

岡山大学を離れ、この文章を書きながら今さらながら心に浮かぶのは、自分は多くの人々に支えられ、また多くの人々に迷惑をかけて過ごしてきたなという感慨です。そうした人々である同窓生の皆さんには、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

同窓会に活気があれば大学もまた活性化するものですが、同窓会の有り様は大学の提供する教育サービスを、受けた側がどう評価しているかを反映しているとも言えます。その意味で、岡山大学の教育が学生にとって本当に良いものとなり、その結果として卒業生が同窓会に積極的に参加するようになって、更にそれがまた大学を活気づけるといった、よい循環が起きることを切に願っています。



## 退職にあたって — 研究者の研究生生活：思いっくまに—

## 石井 忠男



1970年4月1日付で、岡山大学・工学部・電子工学科に奉職した。38年前のことである。振り返り見れば、あつという間の短い期間であったように思われる。

商売人であった父は、「恩給がもらえるから、国鉄に勤めなさい」と中学生の私に常々言い含めた。高校で電気工学を学んだ。就職時には、何となく電気工学は馴染まないと思いつつも、担任の薦めに従って京都の島津製作所に就職した。そのまま働いていれば、ノーベル賞受賞者の拝顔の栄に浴することもできた。翌年、大学の電気工学科に在籍した。何故、また電気工学なのか。選んだ研究室は量子電気物性研究室（犬石嘉雄：電気物性）で卒業テーマは“固体プラズマの実験的研究”であった。将来について考えた。地方でも良いから大学に就職したいと思った。同様な実験を地方で継続するのは無理。地方でもできる研究は理論しかない。修士過程で実験から理論に転向を決意し、理学部（金森順次郎：磁性理論）および基礎工学部（長谷川晃：プラズマ物理；C. K. Birdsall (UC, Berkeley)：プラズマ物理とプラズマ粒子シミュレーション）の授業を履修した。また、教養部の理論物理研究室（西山敏之：多体問題・超流動の理論）にゼミナール参加のため、週1回通った。修士後半より、少しずつ理論研究を始めた。“電子格子相互作用と不安定性”で修了した。いつしか、学生運動で研究ができなくなり、博士課程途中で退学し岡山大学に助手として赴任した。

赴任時の工学部長は美禰先生で、私たちの研究室と電気の兼担であった。岡山大学ではやむなきは実験をと覚悟を決めていた。赴任当初は研究室立ち上げもあって、実験の準備もした。現理学部2号館にあった、仮住まいの古く汚い木造の平屋建て、今にも床が抜け落ちるような部屋で、少ない予算をやり繰りし、来る新校舎での実験装置の設計をした。新校舎1階の実験室で、堅牢な基礎の上に重量級のマグネットを据え、大阪から購入した液体窒素封入の容器を磁極に挟んで実験を行った。とても懐かしく思います。III-V族半導体の磁気抵抗の実験をした。しかし、自然と理論研究を行い、学生にもそれで指導した。志ある優秀な学生は、更に高いハードルを目指し、他大学大学院に進学していった。そのころ“超強磁場下の素励起の研究”に着手し、東大物性研究所の中嶋貞雄先生（超伝導理論）に、ご意見伺い方々、お世話になることになった。また種々勉強することもできた。同年代の研究者あるいはお弟子さんとも種々議論をさせて頂き、また、レベルの高い研究にも接する機会を頂いた。以後2、3年は

ど病気をし、その間、数学演習、卒業論文等で学生さんの指導をする傍ら、理学部理論物理・萬成研究室のゼミ（磁性理論）に参加した。その過程で、工学と直接接点のある超イオン導電体（Superionic Conductors: SIC）と出会い、今日まで、主にSIC研究に携わってきた。

一方、赴任当初は、岡山大学でも犠牲を伴った大学紛争末期で、教養部東門のバリケードと対面したり、1部学生のデモもあったりした。今にして思えば、大きな時代の流れを感じた時期でもあるが、息吹を感じた時でもあった。日本の大学も、これを契機に、提起された種々の問題に対応し変革の時を刻んだ。歴史は繰り返す。大学も国立大学から国立大学法人となり、再び、時代は別のベクトル方向に進みつつある。自由な教育・研究の雰囲気は後退した。

工学部に在職し、工学の基礎を担う理論物理と背中合わせのテーマを紡ぎ、物性基礎論の研究・教育をすることで、いつしか時は過ぎた。大学を去るに当たって、何をしてきたのだろうかと思う。退職し、1人になって、なお研究の真似事ができるということは、残された人生にあって幸せなことなのだろうか。

工学に基礎は必須であり、理論・実験物理との交流は新しい道を開くのに重要である。このような哲学のもとに遂行してきた研究に、多くの学生が参加し、電子および機械工学科を後にした。沢山の学生の顔が卒論のテーマとともに思い出される。何を感じ何を待たであろうか。なにがしかを掴み取って頂けたのではないかとも思うし、それぞれの生き様を考えるとすっかりにでもなっていればとも思う。

社会にあって、自身の生涯とのかかわりを振り返る間もない忙しさに、曝されるこの頃であるかと思う。自身を見つめ、社会を問い、持ち味を発揮するときでもあろう。カタログはもういい。何が重要か、本質は何なのか、を考えるとときでもある。嘗ての大学生も、社会での役割と自身の生涯について考え、よりよき人生を送って頂きたい。幸運を祈ろう！

## 退職にあたって

## 田中 豊



私は一度会社に行きましたが、学生の際は材料系の研究テーマをやり、大学にかえって研究するときには流体系の研究テーマである非定常現象に関する研究をやりました。内容は管系内部で燃料を燃やすときある条件で振動が発生するが、その条件を求めることである。この場合、拡散燃焼がなされるが、気体の拡散過程と燃焼が解析され、温度場が表さ

れなければならない。詳細は忘れたが、流れに乗って運ばれる温度場と、音速で伝わる圧力変化を解析にとりこむ必要がある。これらを何とか解析して学位論文にまとめた。

この後、変動を含めて燃焼場の温度と流速を同時に測定する方法を表し、ドイツでの国際会議で発表した。この発表が良かったものと見られ、私をオーストラリア人によるニュージーランド各地を回る探索旅行に招待してくれた。この旅行の仲立ちがオーストラリアの Sydney University の Bob Bilger である。Bilger に私は現在、予混合気の燃焼を行っているが同種の研究をやっている人を聞いたところ、New South Wales 大学の Brian Milton という回答が返ってきた。そこで文部省在外研究員として、Brian Milton にオーストラリアの滞在先とした。

この後の論文には間欠噴流の構造をあつかったものと密閉容器内三次元火炎伝播などがある。英語の論文を Milton と共同で書いて Combustion and Flame に投稿したが、4人の査読委員のうち1名が英語が悪いという意見で没になった。言葉の壁で論文がだめになってしまうのがいやになっていた。もっと直接的な評価ができないものか。その査読委員は多分日本人であろう。というのは、それを別の英語論文に投稿したところすんなり通ってしまった。なにおかいわんやである。これが私がテーマを後でいう、別のものに変えてしまう一つの理由である。

この後、オーストラリアからアメリカ、イギリスを回って、日本へ帰ってくる間に研究テーマを再度練り直した。そのうちの一つが当時話題となっていた低温核融合の話題である。しかし、この話題はその後の流れを見ていると手をつけなくてよかったものとおもわれる。それより、人間の動きと動作を考え、その動きをいかにして捉えるかが重要であろう。すなわち、進行方向にある障害物の検出を可能とする盲人用視覚補助装置の開発、前方の物体までの距離を把握する実時間距離取得装置の開発、電場をかける電気粘性流体による駆動圧力発生装置の開発など、主として開発の方面に目を転じた。現状では障害物の検出と実時間距離取得はある程度のことではできるが実際に使えるところまで行っていない。また、電気粘性流体はそれを使うシリコンチューブの材料を完全に固まらせてしまうので実用とはならないことがわかった。

以上、退職にあたって、私の研究テーマを設定する履歴を簡単に述べた。また、研究テーマを変えなければならなかったかの理由についても述べた。



## 退職にあたって ～研究者の移動が逆転の発想を生む～

稲葉 英男



大学等で必要とされる科学技術の担い手の基本は、豊かな発想や柔軟な思考ができる若手の人材を如何に育てあげるかにある。若手の研究者には、極力異分野での経験を多く積むことと1回以上の職場異動を奨励すべきである。この裏付けとし

て、著名学術誌の被引用度で世界のトップ10%に入るトップリサチャーの多くは、外国での研究職に就いた経験があります。因みに、このトップリサチャーの半数は、39歳以下の若手研究者です。

北海道出身の筆者は、小さい頃から雪や氷そして低温環境現象を身近に体験してきた経緯もあり、凍結を含む低温環境で発生する現象を利用した研究をライフワークの一つとしてきました。学生時代から低温理学系の研究成果を工学の立場から利活用する実践的研究を推進してきました。

大学院終了後の勤務先は、寒冷地域であるカナダ国の大学で、河川凍結に関する基礎研究を外国人研究者と共同で実施しました。冬期には-40℃もの厳しい気候下での生活の工夫を体験すると同時に外国研究者の合理的発想を身近に体験しました。その後、寒冷地にある北見工業大学へ赴任し、水道管や消火栓の凍結防止、路盤の凍上防止、日射利用融雪剤の開発、透明や色つき氷の生成や滑る氷の製造など低温環境に関する基礎研究を実施しました。

平成元年に岡山大学へ赴任してから、電力会社主導で深夜電力利用水蓄熱に関する研究開発が活発化し、新規な製氷法の開発に関する相談を多くの企業から受けました。特に、水の過冷却現象を利用した管内製氷法の開発は、冷却管内で氷を生成させずに過冷却度の大きな流動低温水を如何に安定的に生成出来るかが研究の焦点となり、北海道での水道管の凍結防止とは逆の観点からの研究を行うことになりました。製氷法の開発に低温生成施設が必要となり、低温の研究は寒冷地で行うのが当然であるとの一般認識があり、その施設要求に苦労しました。“暖かい地域では、冷たい需要が多く、寒い地域では暖かい需要が多い”ことより、岡山大で低温関連の研究を行う必然性があると上層部を説得し、大規模な低温施設の設置にこぎ着けました。岡山大が低温現象の利活用を目指した基礎研究情報の発信源となることができました。新たな研究開発の展開には、異分野の研究者の交流はもとより、研究者のドラスティックな地域異動も欠くことの出来ない要因と言えます。

ここで、私の岡山大学での諸活動を手短かに振り返って

みます。平成元年に岡山大学工学部機械工学科（伝熱工学講座）教授として赴任し、学部及び大学院の伝熱工学及びエネルギー工学関連の教育を担当しました。研究活動は、低温環境下の伝熱現象解明、対流・相変化伝達、新規着剤の開発などを実施し、この間、多くの優秀な学部生や大学院生を世に送り出す機会に恵まれました。社会貢献活動としては、我が国の新たなエネルギー政策や研究開発への提言等を行い、さらに岡山県内外の地域における省エネルギーや新エネルギービジョンの作成に携わりました。

工学部の運営活動として、平成16年度に副工学部長に選任され、工学部教員の研究活動の活性化に向けての企画立案や産学官連携の促進を推進しました。平成17年度から学術研究情報担当理事・副学長として、本学教員の研究力向上に向けて、研究推進産学官連携機構の設立、研究推進事務力向上策等の様々な施策の立案そして実行により、大学改革に寄与しました。また、情報担当業務としては、附属図書館長の立場から、学生の図書館利用促進の施策立案・実施、電子ジャーナルの充実や教育研究成果情報発信を担う機関デポジトリの構築などを行いました。さらに、総合情報基盤センター長として、教職員の電子データや情報の安全且つ安心管理施策の実施、迷惑メール対策や学内情報の迅速且つ安全な発信システム網の構築等を推進しました。

平成20年4月から、国立津山工業高等専門学校（国産高専）の校長として勤務しており、高専における創造的且つ実践的技術者の育成に、今までの経験を生かして寄与する所存ですので、今に増してのご支援を宜しくお願い申し上げます。

岡山大学在職中の諸活動は、伝熱工学研究室の教職員の皆様や学部生・大学院生の諸君、機械工学科並びに工学部の教職員の皆様、さらに、千葉喬三学長を始めとする岡山大学執行部の皆様からの絶大なご支援のもとで実施することができ、ここで深く感謝申し上げます。最後に、岡山大学工学部同窓会の益々発展を祈念申し上げます。

## アメリカでの貴重な出会い

吉尾 哲夫



何とはなく希望に胸ふくらむ春の薫りが、今年もまた漂ってきた。“教育と研究の自由”にあこがれ、企業から母校へ舞い戻って42年余ものキャンパスライフを終え、昨春岡山大学を定年退職した。大学人を“是々非々を貫き、中正な立場から教育と研究を通して人材育成を担う職業”と自認して、ほぼ

その信念が貫けたことに満足し、幸せな気分に入っている。

一方で昨今の混迷の世相に連動して、大学も短時間で効率よく、実学的成果を要求する経済至上主義がまかり通る風潮には暗澹たる思いも残る。しかし、このような時代だからこそ、若い大学人諸氏は、一人一人の個人が今の短期的・浅慮の大学行政を恐れず、学生の全人教育と大学に似合った研究テーマに専念し、普遍的価値のある職業観を再認識することが大切である。

とは言えどの職業でも同じだが、私も振り返ってみて紆余曲折、思い悩みながらも自らの矜持と諦観のバランスを保ち得た要因は、視野を広げ多くの友人・知人の支援による『人間力』の鍛錬を心がけたことが、今日に繋がったように思う。中でも、私の大学人生の基軸になったのは、アメリカでの二人のセラミックス研究者との貴重な出会いであった。

30歳代後半の大学人として自立への人間力を授かったのは、博士研究員として家族とともに留学した、ガラス研究のUCLA Prof. J. D. Mackenzieとの出会いであった。マッケンジー先生からは、研究費の申請文の書き方、研究室の運営の仕方について学ぶと同時に、夫妻とは音楽会、各種パーティーを通しての国際交流も楽しませていただいた。当時、日本の大学での「何でも屋ベテラン助手」であった私にとって、研究に専念でき、土・日は家族のためにだけ時間を使える至福の時を過ごさせていただいた。正にカルチャーショックを受けた1年間であった。

40歳代後半では、私のオリジナル研究テーマとなった“セラミックスの水環境腐食研究”の新規テーマをオーソライズする上で、文献調査から初訪問したセラミックス材料の高温腐食の権威NASA (Cleveland) のDr. Nathan S. Jacobsonとの出会いがあった。彼の“エンジン燃焼環境”と、私の“高温高圧水環境”を基幹腐食環境とする『セラミックスの腐食研究』を新規学術的枠組みとする“Ceramics Corrosion Studies”の国際共同研究を実施するに至った。ささやかながら、セラミックス基礎科学の学問の壁に新しいツメ痕を残すことができたことに感謝している。NASA訪問の度に、ディスカッション後の音楽会、美術館巡り、野球観戦等の文化交流は、国内では得難い人間力の源ともなっている。

アメリカでお二人と出会った、Los Angeles, Cleverandでの野外音楽堂で時空を共にしたコンサートの思い出の曲は、今も私の心のサブリとなっている。

最近の若い大学人諸氏も、人間力・胆力を鍛えるために、是非とも文化に根ざした国際交流の出会いを作るべく努力をしていただきたい、ただ、巡ってくる幸運は平素から準備している人に味方するものであることに心すべきである。時代に流されず、組織に押しつぶされない品格ある生き方ができる大学人の道は、日本の人材育成へ繋がる素晴らしい転職である。前途有為の若人が集う大学に“冬の時代”などあり得ない、『学者は社会の奴隷たれ』（福沢諭吉）

## ご退職によせて

### 鷲尾誠一先生のご退官によせて

工学部機械工学科 高橋 智

鷲尾誠一先生は、平成20年2月に満65歳の誕生日を迎えられ、岡山大学の規定により本年3月31日をもって本学をご退職されました。

先生は、京都大学大学院工学研究科修士課程、博士課程と進まれ、昭和45年4月に京都大学工学部助手に就任されました。その後昭和57年8月に岡山大学工学部機械工学科の助教授に就任され、平成元年12月に工学部教授に昇進、平成17年4月大学院自然科学研究科教授に就任されました。昭和56年には、油圧管路における波動現象の研究により、京都大学より工学博士の学位を授与されました。その後ご定年までの間、研究・教育の分野に数多くの業績を挙げられました。

先生は日頃から、客観的な判断のもと、物事の本質を捉えて真実を探求するという姿勢を貫かれていました。研究においては、オリフィス下流の圧力回復や絞り内の流れの慣性の影響など、多くの研究者が見見過していた事実を実験と解析によって明らかにされています。またこれまで多くの人に信じられてきたキャピテーションの初生について、自らの実験結果とこれまでの説との矛盾に疑問を抱き、固液界面の張力と破断の概念を取り入れ、空洞が発生する極限の現象の解明を追い求めて日夜研究に打ち込んでおられました。キャピテーションの研究当初に当時著名な先生方を交えて討論されていた姿は、まだ研究者として幼かった私にとって大きな刺激でした。既成概念にとらわれず、優れた洞察力の元に、客観的な事実を踏まえて研究を行っていくことが重要であることを強く認識いたしました。また「研究が面白い」と、ご退職される間際まで精力的に研究に取り組み、学生の指導にも当たっておられました。「興味がなければ研究はできない」と言われていましたが、先生の好奇心はこれからも尽きることはないでしょう。

教育においては、大学、学生がどうあるべきかを常に考えられており、大学で人を育てることの重要性について主張されていました。岡山大学における教育改革にも先生が多く関係されておられました。将来を見据えた視点で組織全体を動かし、改革を推し進める原動力になってくれたのは言うまでもありません。学生に対しても時には厳

しく時には優しく父親のような眼差しで接しておられました。己に甘んずる学生にとっては怖い先生としか映っていなかったかもしれませんが、自らのあるべき姿を読み取った学生には、大きな刺激になったことと思います。研究室を卒業した学生の多くがそのことを感じており、卒業生を発起人とする退官記念祝賀会には、研究室の卒業生の約半数が集まってお祝いしたことが、そのことを物語っています。

常日頃から私は先生に「自力をつけろ」と言われていました。大学が大きく変わろうとしている時に、一番頼りになるのはやはり自分の力です。この言葉は私だけでなく、社会全体が大きく変わろうとしている現在に生きる卒業生の皆様にも当てはまります。これからあるべき姿を探究すべく、他人に振り回されず、自力をつけ、己の力で切り開いていくことが工学部卒業生として重要と考え、この場を借りて紹介させていただきました。

先生は、本年4月に岡山大学名誉教授の称号を授与されてご退職された後、玉島にある岡山職業能力開発大学の校長先生としてお勤めであり、学生の指導や技術者の養成にご貢献されております。

これまでの先生のご功績とご尽力に対して深く謝意を表します。また先生のご健康を祈念申し上げます。

### 石井先生の思い出

柳瀬眞一郎

石井忠男先生は、大阪大学工学部の電気系の課程を修了され、岡山大学では固体内のイオン・電子の挙動の理論的研究を続けられました。私が1980年に岡山大学の共通講座工業数学へ就職したとき、先生は共通講座応用物理学で働いておられましたので、同じ講座のメンバーであったということになります。けれども、実際には工業数学は機械・応用機械工学科と一体であり、応用物理は電気・電子工学科と一体となっていたため、ほとんど一緒に行動することはありませんでした。その後、共通講座の枠内での移動の結果、宮崎茂次教授・柳川佳也助教授と私がメンバーであった工業数学に加われまして、ある程度親しくお付き合いをするようになりました。先生と本当の意味で共同で働くようになったのは、皮肉なことに2000年に

共通講座が解体されて、先生と私とが機械工学科内の機械基礎学教育研究分野を構成するようになってからです。その時点で、私は教授、先生は講師の役回りでしたが実際には先生のほうが約10歳年上で、私としてはどう対応しているのかかなり苦慮しました。まず卒業研究の学生ですが、最初の1-2年は色々な方法の試行錯誤を行いました。結局配属されてきた学生に我々の研究テーマを見せて、石井先生と私のどちらかを選ばせるという方法を基本的に採用しました。予算はお互い実験をしませんでしたので、あまり必要なかった上、国立大学法人化以前はある程度の校費がありましたので、細かいことは言わず適当に使っていました。私の印象ですが、あまり問題はなかったように思っています。ただ研究テーマがあまりに異なっていたので、機械基礎学に配属された学生は最初かなり戸惑っていたことと思いますし、内部で完全に2チームに分かれた状態になったのは少し残念だったと思います。

2005年に私が流体力学講座へ移った後、先生は機械基礎学講座に一人残された形となりましたが、学生にとっては研究テーマが明確となった点はむしろよかったのではないかと思います。なお、石井先生の指導された最後の学生が、今年度、私の研究室で修士となり、先生にいただいた貴重なお土産と思っています。

これまで述べておりますように、先生とは専門が非常に異なっておりますのでほとんどディスカッションをすることはありませんでした。せいぜい学生の卒業研究時に「量子力学を使った難しい研究をしているなあ」と思ったくらいです。ただ、先生が退職される2007年度のことですが、何かのきっかけで先生の研究史を拝聴いたしました。大変多くの超一流の研究者との交流があり活発な研究をされていたこと、また研究テーマである超イオン伝導の分野では世界的な研究者であることがよくわかりました。その点では岡山大学（または他の大学）でしかるべき地位を占めていただけなかったことは、私といたしましては大変残念です。石井先生の交流しておられた方々と私の交流範囲はほとんどオーバーラップがありませんが、ただ一人、プラズマ理論・非線形波動で世界的に著名な長谷川晃だけが互いに関係があったことを知り、非常に驚きました。私は、院生の時代に長谷川先生の特別講義を受講しました。その時、変な質問をしたような記憶があります。石井先生はもっと密に研究面で交流されたようですが、時間があまりなかったため、詳しくお聞きできなかったのは残念です。石井先生は、一見口数が少ないように見えますが、実際は多弁で、特に研究に関係した内容となると話題が

あふれるような方でした。先生のような純粋なタイプの研究者が伸び伸びと活躍しにくくなった今日の日本の大学は決していい状況ではないように思います。今後、もっといい方向へ変化して行ってもらいたいものであると思っています。石井先生には大学の外から見守っていただくばかりでなく、非常勤講師としても助けていただきたいと期待していますが、それもなかなか難しく、何とかならないものかと考えています。

まとまりのない内容をだらだらと書いてきましたが、拙文が石井先生の人柄と御業績を知るきっかけとなりましたら、私の幸甚とするところです。



## 田中 豊先生のご退職に寄せて

システム工学科 永井 伊作

田中豊先生は、平成19年9月30日に岡山大学をご退職されました。

先生は、昭和40年3月岡山大学工学部機械工学科卒業、昭和40年4月より株式会社日立製作所産業機器事業部研究員として勤務の後、昭和41年12月岡山大学工学部助手に着任されました。昭和51年10月岡山大学工学部講師に昇任、昭和53年9月京都大学で工学博士を取得、昭和54年8月岡山大学工学部助教授に昇任、平成元年12月岡山大学工学部教授に昇任されました。その間、昭和63年9月より文部省在外研究員としてオーストラリア、アメリカ合衆国、連合王国へ平成元年6月まで出張され、同時にオーストラリア New South Wales 大学客員教授として平成元年5月まで留学されております。岡山大学では約42年間の大変長きにわたって工学部ならびに大学院自然科学研究科（工学系）における教育・研究に従事され、後進の育成・指導に熱意を注がれると共に、学術の発展に多大な貢献をしてこられました。

研究面では、機械工学分野において多数の優れた研究業績を挙げられ、工学部助手着任から教授昇任までの期間には特に燃焼に関する分野で多くの業績を挙げられました。その間、当時まだ黎明期であったパソコンに早くから着目され、計測データの自動処理や解析を行うためのソフトウェアや装置を多数開発され、数々の研究成果を精力的に挙げて来られました。教授昇任以降は得意の電子回路の知識を活かしたメカトロニクス、ロボティクス分野の研究を展開され、視覚装置や感覚を持つ人工ハンド、自律走行車など数々の業績と共にその分野の発展に多くの

貢献をされました。昭和54年4月日本機械学会賞、平成14年3月日本機械学会フェローを受賞されました。

大学運営では、特に工学部入試制度委員会委員長を務められるなど、岡山大学の発展に大変寄与されました。また、工学部CAE教育システムの導入においても多大な貢献をされました。オーストラリアNew South Wales大学学位論文外部審査委員も務められ国外の大学における貢献もされました。

学会等では、日本機械学会商議員、日本機械学会評議員、日本機械学会論文査読委員、(財)中国技術振興センター地域コンソーシアム研究開発事業委員を歴任され、機械工学の発展に多大な貢献をされました。

研究室の助手・助教として私もこの約10年の間に実に多くのことを教えていただきました。このたびの先生のご退職にあたり、先生のご指導とご尽力に対し心からのお礼と敬意を述べさせていただくとともに、今後の更なるご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

## 稲葉英男先生の岡山大学ご退職と 津山高専校長ご就任によせて

大学院自然科学研究科(工学部機械工学科) 堀部 明彦

稲葉英男先生は、この度岡山大学を退職され、津山工業高等専門学校に就任されました。稲葉先生は、スケールの大きな研究・教育者であり、現在の大学教員に求められている、教育、研究、社会貢献、および学内業務全てに渡って顕著な功績を残されており、同じ研究室でご指導いただいた身としては、その行動力に感銘を受けていたところです。岡山大学ご退職にあたり、ご略歴とご功績の一部をご紹介します。

稲葉先生は、昭和54年に北海道大学大学院工学研究科博士課程を修了され、カナダアルバータ大学の博士研究員を経て、昭和55年に北見工業大学工学部の助教授に就任されました。その後、平成元年には岡山大学工学部機械工学科教授として赴任されています。平成16年には、岡山大学工学部副工学部長に就任され、平成17年6月からは岡山大学理事・副学長に就任され、法人化後の困難な時期における大学運営にあたりられました。平成20年4月には津山工業高等専門学校の校長になられるとともに、岡山大学名誉教授の称号を授与され、現在は岡山大学経営協議会委員として学外から岡山大学をサポートしていただいております。

研究面に関しては、伝熱工学がご専門であり、熱エネ

ルギーの有効利用を目的とした蓄熱・熱輸送現象の解明や工業的利用への展開など、非常に高名な研究者として多くの業績を残されています。また、最近では、地元企業と開発を行った水蒸気を出し入れする新規吸着剤を用いた冷凍空調技術の研究をなされ、世界的に注目を集めております。これまで教科書や査読付論文約260編、解説約80編の著作があり、日本機械学会、日本熱物性学会や日本冷凍空調学会など関連する学会の論文賞も受賞されております。

また、日本熱物性学会会長を始め関連学会の支部長、理事、幹事、研究分科会主査などを歴任され、また、殆ど全ての関連学会の全国講演会を実行委員長として岡山大で開催されました。さらに国や市町村の技術・エネルギー委員なども数多く歴任され、技術の発展に努められております。数多くの国家プロジェクト予算や科学研究費補助金等も獲得されています。

このように、研究や公共活動等で非常にご多忙でありましたが、学生に対しては大変に熱心に教育・指導をなされ、研究室でも所属学生に広範囲な知見をもって指導をされており、一方でユーモアを持って気さくに学生に話しかけられ、談笑することも数多く拝見いたしました。コンパや毎年夏休みに行く研究室の小旅行にて、学生達とふれあうことも楽しみにされておられました。

稲葉先生のご姿勢で感銘を受けたことは数多いのですが、紙面の関係上、二点のみご紹介いたします。一つ目は、何かの取りまとめにせよ役職にせよ、なにか発展させる、改革する、新たなことに取り組むとの点を恒に打ち出されて実行されることです。諸事に追われているときには、前例の通りと成りがちなのですが、稲葉先生の場合は、常に色々なアイデアを出されて、優れた実行力で成し遂げられておられました。現在でも津山高専の校長になられてからは、岡山大学との包括連携など津山高専がマスコミに報道されることが多くなったと感じております。二つ目は、非常に広範囲な知見と知己を有しておられることです。工学部では基礎研究に加えて工業的に役立つよう社会との接点が必要になりますが、非常に顔が広く、また情報量が多く、多くの企業の方などが遠方より稲葉先生を訪問されておりました。

数多くのご功績に対して岡山大学教職員の一人として深く感謝申し上げますとともに、ご健康にご留意されてご活躍なさいますことをお祈りし、今後とも大学や研究室に対してご指導、ご鞭撻を賜りたくお願い申し上げます。

# 学 科 近 況

## 物質応用化学科の近況

物質応用化学科 酒井 貴志

物質応用化学科の最近3年間程度のトピックスを挙げるとすれば、まず、教員の変動があり、次いで学科の研究室の全面改修があげられます。

この間、次の通り教員の変動がありました。平成18年3月には、阪田祐作先生が定年退官され、同年10月にはタラダ バスカル先生が転出されました。また、平成18年4月には、触媒機能化学教育研究分野教授として和田雄二先生が着任されましたが、平成19年3月をもって転出されました。平成19年3月には、宇根山健治先生と島村 薫先生が定年退官され、高城 淳先生が転出されました。また、平成19年9月には内田哲也先生が講師に昇任されました。さらに、平成20年10月には触媒機能化学教育研究分野教授として菅 誠治先生が、機能分子化学教育研究分野助教として萬代大樹先生が着任されました。この数年間で、学科の教員配置がかなり変わりましたが、詳細は学科HP (<http://achem.okayama-u.ac.jp/>) をご覧ください。本学科としては、大学の定員削減計画の中で、平成22年3月までに4名の教員の削減が行われる予定になっており、大変厳しい状況です。

平成17年から工学部の大型改修が始まりましたが、第二期改修工事として平成18年7月から物質応用化学科の本館部分（1号館南部）の改修が始まりました。同年12月には南東部が完成し、高分子材料学、粒子材料学、分子変換化学、および、分子設計学の4分野が移転しました。翌平成19年4月には、残りの触媒機能化学、無機材料学、無機物性化学、合成有機化学、および、有機金属化学の5分野が1号館南西側に入り、学科の9研究分野すべての改修移転が完成し、学科として初めて一カ所にまとまり、研究室内部が一新され快適になりました。ただ、学生のゆとりスペース等の供出のため、1研究室あたり2スパン程度の面積が縮減されたのはつらいところでした。

本学科は、昭和35年（1960年）に工業化学科として発足して以来、昭和41年（1966年）に合成化学科が発足し、両学科が昭和62年（1987年）に精密

応用化学科として統合され、さらに平成12年（2000年）に物質応用化学科として改称され現在に至っています。この約48年間の歴史の中で3000余名の学生を世の中に



改修後の物質応用化学科（工学部1号館前面）

送り出し、それぞれの方が各界の第一線で活躍されています。現在では、学部定員が60名で、これに3年次編入生が10名程度加わります。そのうち最近では大学院博士前期課程へ7割近い学生が進学し、また、博士課程に数名が進学しています。

最近、工学部の入試倍率が低下し、理系離れ、特に工学部離れという言葉が使われていますが、社会からの工学系に対する需要はますます高まっており、卒業生は好条件で企業に受け入れられています。工学部の倍率低下の背景には、研究者、技術者が社会基盤の重要な下支えをしているが、正当に（かつこよく）評価されていない面があるのではないかともいわれています。どうか、卒業生の皆様が、理系人間・工学系人間の代表として社会を牽引していく役割を果たしていただき、理系の地位を一層高めていただき、若者に工学部の魅力をアピールしていただきますよう期待しております。

## 電気電子工学科の近況

電気電子工学科 2008年度学科長 上浦 洋一

工学科の研究領域はハードからソフトまで、また材料・ミクロなデバイスから電力・エネルギーや大規模システムまで、様々な座標軸の端から端まで広い範囲をカバーしている。社会的ニーズが高く、卒業生は企業から引く手あまたの状態、就職にたいへん恵まれている学科である。

まず、過去5年間（平成15年度以降）における当学科の教育研究分野構成の変化と人事異動について報告する。

教育研究分野構成については、平成15年12月には

電子機能工学教育研究分野が新設され、8教育研究分野体制になった。平成17年4月、岡山大学の大学院重点化に伴い、学部の教員組織は大学院に準じて変更になり、電気電子工学科は自然科学研究科産業創成工学専攻電気電子機能開発学講座に属する8教育研究分野、すなわち、超電導応用工学（旧電気機器学）、電磁デバイス学（旧電力工学）、システム制御工学（旧電子計測学）、波動回路学（旧電子回路工学）、計測システム工学（旧電子機能工学）、能動デバイス学（旧知能デバイス工学）、デバイス材料学（旧材料物性学）、電子物性学（旧電子物理学）で構成されることになり、現在に至っている。

人事異動については各教育研究分野毎に述べる。また、あわせて各分野の教育研究活動についても述べる

#### (1) 超電導応用工学

平成15年10月に金錫範助教授がソウル大学より赴任、平成16年8月小松原均技官が退官した。現在（平成20年度）のスタッフは、村瀬暁教授、金錫範准教授、七戸希助教の3人である。研究面では、最新の超電導材料と技術を活用し、交流損失・安定性・ピンニング・歪解析・クエンチ検出・コイル保護・ウェーブレット変換による可視化・磁気クロマトグラフィー・小型NMR・超電導モータ・ナノ粒子制御・超電導アクチュエータなどの超電導応用機器の基盤技術、超電導特性測定法および解析、高温超電導応用に関する研究を行っている。

#### (2) 電磁デバイス学

平成18年9月に藤原耕二助教授が同志社大学に教授として転出した。現在（平成20年度）のスタッフは、高橋則雄教授、宮城大輔助教の2人である。研究面では、電磁機器の小型・高効率化という時代の要請に応え、電気・電子機器の最適設計を目的に、三次元磁界解析、磁気測定、磁性材料の電気機器への応用などに関する研究を行っている。主な研究テーマは、有限要素法を用いた三次元磁界解析法、電磁機器の最適設計法、解析精度向上のための磁気特性測定技術の開発、モータ、磁気ヘッドなどの高機能化に関する研究である。

#### (3) システム制御工学

平成17年3月に西竜志助手が大阪大学に助教授として転出し、平成20年4月に今井純講師が准教授に昇任した。現在（平成20年度）のスタッフは、小西正躬教授、今井純准教授の2人である。研究面では、制御理論とシステム最適手法の研究を軸に大規模離散値システムや分布定数系への応用に関する研究である。主な研究テーマは、知的制御システム、生

産スケジューリング、物流搬送システムの設計と制御、分布定数系のモデリングと制御、システム同定技術の実用化である。

#### (4) 波動回路学

平成18年7月に佐藤稔は助教授に昇任した。現在（平成20年度）のスタッフは、野木茂次教授、佐藤稔准教授、藤森和博助教の3人である。研究テーマはマイクロ波・ミリ波帯の電子回路とアンテナに関するものが主であり、ミリ波帯で動作可能な発振器・ミキサの回路構成法、マイクロ波電力の分配・合成、マイクロ波無線電力伝送などである。

#### (5) 計測システム工学

平成15年12月塚田啓二が教授として着任した。紀和利彦および山田博信は、それぞれ平成16年4月、平成18年4月に講師および助手として着任した。現在（平成20年度）のスタッフは、上記3人（ただし、山田は助手から助教へ職名変更）である。研究テーマは、様々な計測システムに関するセンサデバイスの開発から計測手法の開発までの広い範囲にわたる。主なテーマは、水素センサデバイスの開発とセンサネットワークの構築、低周波磁気非破壊検査システムの開発、超伝導量子干渉素子（SQUID）システムの開発、テラヘルツ波ケミカル顕微鏡の開発などである。

#### (6) 能動デバイス学

平成18年4月に長屋智之が大分大学に教授として転出した。現在（平成20年度）のスタッフは、奈良重俊教授、西川亘助教の2人である。研究面では、奈良が、カオスのダイナミクスを用いた迷路求解ロボットの試作、神経回路網における記憶のカオスのダイナミクスとその応用、セルオートマトンを用いたデジタル信号の新記述方法とその応用、光電子能動素子結合系のパターンダイナミクスとその応用、量子井戸構造における電子状態の形状効果とその電界印加特性、プロトンが関与した化学結合における電子相関効果などについて、また西川が、高密度プラズマ中の原子過程モデルの構築、次世代露光器用EUV光源開発などについて研究を行っている。

#### (7) デバイス材料学

平成20年4月に山下善文が准教授に昇任した。現在（平成20年度）のスタッフは、上浦洋一教授、山下善文准教授、石山武助教の3人である。研究内容は半導体材料物性およびその高機能化であり、研究対象はシリコンやシリコンカーバイドなどIV族半導体から窒化ガリウム、酸化亜鉛などの化合物半導体まで幅広い物質であり、バルク結晶に加えて薄膜試

料も対象としている。これらの結晶中の遷移金属・希土類元素・水素などの不純物欠陥とそれらの複合体、あるいは、転位などの拡張欠陥について、その原子構造・運動・電気的光学的磁気的物性を、主として実験的に研究している。さらに、それらの知見に基づき、半導体デバイスの発光の高効率・大強度発光を目指す研究も行っている。

#### (8) 電子物性学

過去5年間（平成15年度以降）における人事異動はない。現在（平成20年度）のスタッフは、東辻浩夫教授、鶴田健二准教授、東辻千枝子助教の3人である。研究活動としては、グループ発足から一貫して新規デバイス・材料の理論解析と計算機シミュレーションによる設計に主眼をおいている。特に、急速に成長するパソコン性能をタイムリーに援用するPCクラスタ構築と並列計算・グリッド計算技術により、分子動力学・モンテカルロシミュレーション、密度汎関数電子状態計算、さらに近年では電磁界シミュレーション法の開発と大規模化を行っている。これらの物性シミュレーション手法を高度に活用し、半導体プロセスプラズマ中の微粒子構造・相転移、ナノ構造半導体／セラミックス（欠陥、界面、微粒子集合など）の力学特性・電子状態・輸送過程、新規光・音響デバイスの設計などに取り組んでいる。

次に、日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定について述べる。当学科は平成14年11月にJABEEの審査を受審し、平成15年4月15日付で教育プログラム「電気電子工学プログラム」がJABEE認定基準に適合していると認定された。さらに、平成19年11月にJABEEの継続審査を受審し、平成20年5月8日付で「電気電子工学プログラム」が認定された。現在、以下の5つの学習・教育目標を掲げて教育活動を行っている。

- A. 環境・エネルギー問題に対する理解力
- B. 技術者倫理
- C. 確実な専門的基礎学力と応用能力
- D. デザイン能力と社会に評価されるアウトカムズ
- E. 国際的視野とコミュニケーション能力

以上のJABEE審査受審・認定に関連して、以下のような教育改善活動を行ってきた。このような活動を通じて学科の教職員が一丸となり教育改善を進めるなかで、さまざまな成果が得られたと同時に教職員の意識向上が学科の貴重な財産となっている。これは今後も教育改善活動を継続する上で極めて有効に機能するであろう。

#### 教育改善・啓発・発表活動（平成14～20年度）

- a) 学習等達成度記録簿の新設とそれを用いたアドバイザ面談
- b) 「特別研究」の定量的評価
- c) 数学系科目の整理・統合と実験科目の検討・改訂
- d) 授業参観
- e) 教育に関する講演会の主催
- f) 4年次学生に対する工学／技術者倫理に関する講演会
- g) 教育改善活動に関する対外発表
- h) 第3年次編入学生単位認定の改善
- i) 学習・教育目標の改訂
- j) 英語力の育成
- k) 学生に対する知的財産に関する啓発活動
- l) 大学院博士前期課程全学生に対する中間発表会の実施
- m) 学生の履修・単位取得状況の調査・把握
- n) 1年次学生との懇談会
- o) 授業の学習達成度確認表を用いた学習状況の把握

以上、当学科の組織、人事異動と研究・教育活動について述べてきました。本年3月には当学科の建物（工学部3号館）は改修がすべて終わり、すっかり生まれ変わりました。建物の基本構造はほとんど変わりませんが、エレベータが設置され、教職員、学生が自由に利用できる多目的スペース「リフレッシュコーナー」ができました。さらに、教育・研究を支えるさまざまなユーティリティーが充実し、建物のセキュリティも飛躍的に向上しました。同窓会の皆様におかれましては、ぜひとも一度当学科へお越しになりご覧いただきたいと思います。われわれスタッフもこれを機会に心機一転し、学科をあげてさまざまな努力を続け、さらなる発展を目指す所存です。今後とも皆様からのご指導、ご支援を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

## 職場報告



日本板硝子株式会社  
BP事業部門 BP研究開発部  
薄膜表面領域 ゴルゲルグループ  
**藪田 武司**

私の勤めている日本板硝子株式会社は1918年（大正7年）11月に、コルバーン式製板法による板ガラス製造を目的として、米国リビーオーエンスフォードガラス社から技術導入し、日米板ガラス株式会社として設立されたのが起源です。その後1931年に社名が日本板硝子株式会社となり、板ガラスの製造を中心に、自動車用ガラス、ガラス繊維など事業を展開して参りました。また2006年にイギリスの老舗ガラスメーカーであるピルキントン（PILKINGTON）社を完全子会社化したことにより、現在では従業員数約32000人、世界20カ国以上に製造拠点を有するグローバル企業に発展いたしました。

私の所属しているBP事業部門とは建築（Building Products）用ガラスを扱う部門であり、皆様の住宅やビル用の窓ガラスなどを製造、販売しており、私の仕事はそれらガラスの研究開発にあたります。建築用のガラスと言うと、「窓ガラス」という一言で言い表されてしまいがちですが、その中には、単板ガラスはもちろん、複層ガラス、防犯ガラス、防火ガラス、合わせガラス、真空ガラス、エコガラス、太陽電池用基板ガラスなどその種類は多岐にわたります。私も当社に入社するまではこれほど多くの種類があるとは知らなかったのが驚きを覚えたほどです。

さて、私の所属しているBP研究開発部は、イギリスと兵庫県伊丹市に拠点を有しております。伊丹市にあるBP研究開発部には、ガラス組成、板ガラス製造、機能性薄膜を研究開発する3つのグループおよび知財を扱うグループがあります。私が仕事している薄膜表面領域では、オンラインCVD法を用いた透明導電性薄膜の開発や、真空成膜法を用いた光触媒クリーニングガラスの開発、ゾルーゲル法を用いた機能性薄膜の開発を行っています。BP研究開発部という名前から、建築用ガラスのみ対象に

した部署だと思われがちですが、建築用のみならず、自動車用やその他様々なガラス表面の機能化を行っている部署です。特にゾルーゲル法を用いた商品とし



ては自動車用ガラスが多く、これまでに撥水ガラス、低反射ガラス、赤外線（IR）カットガラスなどを開発し、既に商品化しております。ゾルーゲル法は低温プロセスで膜を形成させることが出来るため、機能性の有機物を含有した膜を得られることが特徴です。このような特徴を活かして、新たな機能性薄膜の開発を行っています。私は入社以来、ゾルーゲル法を用いたガラス表面の濡れ性制御に関する研究開発を担当しています。先にも述べたとおり、「ガラス」と一言で申しましてもその用途は多様であり、その用途にマッチしたガラス表面の特性が要求されます。その特性に合うようなガラス表面に改質するための研究を日々行っています。

最後になりますが、日本板硝子はグローバル企業となり、日本で開発した商品が世界中で販売されることとなります。このように世界を相手にして仕事することは、確かに苦勞することもあります。それだけに仕事を完成させる達成感はずごく大きく感じます。当社に関心を持たれた方は、是非当社のホームページ（<http://www.nsg.co.jp>）をご覧ください。



ナブテスコ(株) 技術本部

CAE・材料技術部

**山本 裕司**

（平成16年3月大学院自然科学研究科  
博士前期課程機械システム工学専攻修了）

私が勤務するナブテスコ株式会社（Nabtesco Corporation）は、2003年9月、それぞれ長い歴史を持つ帝人製機株式会社と株式会社ナブコの経営統合により、両社を完全子会社とする持株会社として誕生しました。さらに2004

年10月には両社を吸収合併し事業統合を行うとともに、事業別に社内カンパニー制を導入し、効率的な運営を可能とする体制を確立しました。現在、当社はグローバルに展開するナブテスコグループの中核企業として、「モーションコントロール」をキーワードに、当社の強みである「コンポーネント技術」「システム技術」を活用し、独創性の高い製品開発の推進を図っています。安定した技術力により世界のユーザーに高い評価をいただくと共に、空・陸・海における様々な世界シェアNO.1、国内シェアNO.1の地位を確立しております。

とは言うものの、会社自体が新しく社名だけでは何を製造している会社なのか想像がつきにくいかと思いますが、例えば、建物用自動ドア。このマークをご覧になられたことはありませんか？このマークが付いている自動ドアは当社の製品で、国内シェア約50%を誇ります。また、自動車工場などで見られる産業用ロボット。その関節に使用されている精密減速機は当社の製品で、世界市場トップとなる約60%のシェアを誇ります。他にも、飛行機、自動車、鉄道、船舶といった輸送分野から、建設機械、風力発電、福祉機器といった産業・生活分野まで、当社の製品は意外とみなさんの身近なところで活躍しています。

ナブテスコグループは、海外市場にも積極的に進出し現在では北米をはじめ欧州、アジア地域の各国に拠点を置いて事業を行い、市場のグローバル化に対応しています。国内では、本社（東京）のほか、山形、三重、名古屋、岐阜、神戸、北九州にあわせて11の拠点を置いています。

私は2004年に入社して以来、神戸に拠点を置く技術本部CAE・材料技術部に所属し、コーティング材や樹脂材の摩擦摩耗、各種機械部品の疲労寿命の評価に関する仕事に従事してきました。なかでも

最近注力しているのは、精密減速機向けの高強度材の評価です。近年自動車業界は増産傾向にあり、産業用ロボットの需要はめまぐるしく増加しています。お客様の使用状況に対するニーズも高速化・高頻度化へと拡大する傾向です。このような状況において、我々技術本部では精密減速機の更なる高性能化の実現を支援すべく、より良い材料の評価・選定を行っております。

大学院在学中は、空圧アクチュエーターを用いた人にやさしいパワーアシスト装置に関する研究を行っていましたが、材料とは全く縁が無く、入社当初は現職で要求される材料評価の知識はほぼ皆無でした。しかし努力すれば不思議と何とかなるもので、入社5年目にしてやっと材料評価の奥深さを実感できるようになりました。理論と経験のいずれか一方だけではなくその両者が揃ってこそ初めて課題を解決できる点がおもしろいと感じています。

当社の企業理念は、「独創的なモーションコントロール技術で、移動・生活空間に安全・安心・快適を提供します」です。これは、ものづくりを通して社会に貢献するという当社のスタンスであると同時に、“人にやさしい製品を創りたい”という私自身のモチベーションでもあります。今後もより信頼性の高い製品を提供できるよう、材料分野の高度専門家として成長を続けたいと思います。



精密減速機RVシリーズ



フライト・コントロール・  
アクチュエーション・システム



プラットホームスクリー  
ンドア (PSD)

**[新任教員の紹介]**

- 平成20年4月1日付け就任
  - 大学院自然科学研究科（機械工学科）  
名古屋大学 エコトピア科学研究所 機関研究員  
助教 坪井 和也
- 平成20年9月1日付け就任
  - 大学院自然科学研究科（機械工学科）  
香川大学 工学部 教授  
教授 呉 景龍
  - 大学院自然科学研究科（電気電子工学科）  
日本電信電話株式会社 主任研究員  
教授 深野 秀樹

**[叙勲者紹介]**

- 平成20年春の叙勲
  - 山本 辰馬  
名誉教授（電気電子工学科） 瑞宝中綬章

**[昇任教員の紹介]**

- 平成19年10月1日付け昇任
  - 大学院自然科学研究科（生物機能工学科）  
大学院自然科学研究科（生物機能工学科）講師  
准教授 大槻 高史
- 平成20年4月1日付け昇任
  - 大学院自然科学研究科（情報工学科）  
大学院自然科学研究科（情報工学科）講師  
准教授 乃村 能成
  - 大学院自然科学研究科（電気電子工学科）  
大学院自然科学研究科（電気電子工学科）講師  
准教授 今井 純
  - 大学院自然科学研究科（電気電子工学科）  
大学院自然科学研究科（電気電子工学科）講師  
准教授 山下 善文
  - 大学院自然科学研究科（システム工学科）  
大学院自然科学研究科（システム工学科）助教  
講師 亀川 哲志

**[定年、転出、退職教職員の紹介]**

- 平成20年3月31日付け定年退職
  - 大学院自然科学研究科（機械工学科）  
→中国職業能力開発大学校 校長  
教授 鷺尾 誠一
  - 大学院自然科学研究科（機械工学科）  
→自適  
准教授 喜多 義範
  - 大学院自然科学研究科（機械工学科）  
→自適  
准教授 石井 忠男
  - 工学部創造工学センター  
技術専門員 植木 信幸
  - 工学部創造工学センター  
技術専門員 小原 憲義
  - 工学部創造工学センター  
技術専門職員 稲田 誠司
- 平成20年3月31日付け退職
  - 大学院自然科学研究科（生物機能工学科）  
→九州大学 歯学研究院 准教授  
助教 都留 寛治
- 平成20年7月31日付け退職
  - 大学院自然科学研究科（システム工学科）  
→オンタリオ工科大学 エネルギーシステム・原子核科学部 准教授  
准教授 ホサム・アブデル・ガッバール

## [受賞研究の紹介]

職名	所属学科	氏名	受賞名	受賞日
教授	電気電子工学科	高橋 則雄	電気学会第10回優秀技術活動賞(技術報告賞)	19.5.25
助教	システム工学科	大久保寛基	日本機械学会生産システム部門優秀講演論文表彰	19.7.13
教授	通信ネットワーク工学科	古賀 治	電子情報通信学会功労顕彰賞	19.9.11
教授	システム工学科	則次 俊郎	日本ロボット学会フェロー	19.9.14
准教授	生物機能工学科	大槻 高史	生体機能関連化学シンポジウム講演賞	19.9.28
准教授 教授	機械工学科	岡田 晃 宇野 義幸	The 4th International Conference on Leading Edge Manufacturing in 21st Century 「The Best Paper Award」	19.11.8
准教授 教授	機械工学科	河原 伸幸 富田 栄二	Small Engine Technology Conference 2007 Best Paper Award	19.11.1
教授	機械工学科	富田 栄二	日本マリンエンジニアリング学会 学術講演会優秀講演賞	19.11.14
准教授 教授	機械工学科	岡田 晃 宇野 義幸	2007年度精密工学会中国四国支部広島地方学術講演会 優秀講演賞	19.11.16
教授 助教	機械工学科	宇野 義幸 岡本 康寛	2007年度精密工学会中国四国支部広島地方学術講演会 優秀講演賞	19.11.16
准教授	機械工学科	河原 伸幸	日本燃焼学会 奨励賞	19.12.6
教授	機械工学科	宇野 義幸	岡山リサーチパーク研究・展示発表会 産学官連携推進賞	20.2.1
助教	機械工学科	岡本 康寛	岡山リサーチパーク研究・展示発表会 ベストプレゼンテーション賞	20.2.1
教授 助教	機械工学科	多田 直哉 内田 真	平成19年度日本非破壊検査協会論文賞	20.5.21
助教	機械工学科	岡本 康寛	平成19事業年度マザック高度生産システム 研究論文賞	20.5.30
准教授 教授	機械工学科	岡田 晃 宇野 義幸	電気加工学会論文賞	20.6.13
教授	システム工学科	井上 昭	中国・四国工学教育協会賞	20.7.1
講師	システム工学科	亀川 哲志	SICE Annual Conference 2008 Interactive Organized Session Paper Award	20.8.22
准教授	生物機能工学科	金山 直樹	第44回生物工学奨励賞(斎藤賞)	20.8.27

## [学位取得者名簿]

授与月日：2007年9月30日

【課程博士】

氏名	学位論文名	専攻分野 の名称	専攻名	大講座名	主査教員名
小松 富士夫	フィンチューブ熱交換器伝熱面に塗布した高分子取着剤の水蒸気取着特性に関する研究	工学	エネルギー 転換科学専攻	エネルギー システム学	堀部 明彦
白木 康博	電磁ノイズの予測・抑制のための解析技術の実用化に関する研究	工学	産業創成工学専攻	電気電子機能 開発学	高橋 則雄
梶浦 英樹	Identification, properties, and action mechanism of a reactivating factor for adenosylcobalamin-dependent glycerol dehydratase (ビタミンB12補酵素関与グリセロールデヒドラターゼの再活性化因子の同定と性質および作用機作)	工学	機能分子化学専攻	生体機能設計学	虎谷 哲夫

授与月日：2007年9月30日

## 【論文博士】

氏名	学位論文名	専攻分野の名称	専攻名	大講座名	主査教員名
渡邊 光	Studies of Novel Cyclic Pentasaccharide-Forming Enzymes from Bacillus Strains (Bacillus 属細菌が産生する新規環状五糖生成酵素に関する研究)	工学	生体機能科学専攻	生体機能設計学	虎谷 哲夫

授与月日：2008年3月25日

## 【課程博士】

氏名	論文題目名	専攻分野の名称	専攻名	大講座名	主査教員名
中村 克己	デジタルプリント回路基板の低雑音設計を目的としたLSI電源系モデルLECCS-coreの開発	工学	数理電子科学専攻	情報通信システム学	古賀 隆治
箱守 聰	データ漏えいとサービス妨害を抑制する基盤ソフトウェアの研究	工学	数理電子科学専攻	知能計算システム学	谷口 秀夫
岩崎 正明	連続メディア通信処理向けオペレーティングシステムの研究	工学	産業創成工学専攻	計算機科学	谷口 秀夫
Hanno Volker Ackermann	Efficient Computational Scheme for 3-D Shape Reconstruction from Video Images (ビデオ画像からの3次元形状復元の効率的な計算手法)	工学	産業創成工学専攻	計算機科学	金谷 健一
川島 潤	組込みLinuxの高信頼化に関する研究	工学	産業創成工学専攻	情報通信システム学	船曳 信生
佐藤 公泰	応力印加DLTS法および赤外吸収法によるSi中の白金・水素複合欠陥の研究	工学	産業創成工学専攻	電気電子機能開発学	上浦 洋一
石橋 直彦	燃料電池発電システムにおける連続時間一般化予測制御によるロバスト温度制御	工学	産業創成工学専攻	知能機械システム学	井上 昭
馬 東輝	複合材料の疲労挙動とその弾性波解析に関する基礎的研究	工学	産業創成工学専攻	機械生産開発学	鳥居太始之
片岡 範生	YAGレーザを用いた高硬度・高機能材料への精密微細加工に関する研究	工学	産業創成工学専攻	機械生産開発学	宇野 義幸
山口 大輔	SD印象評価データ分析法改善のための灰色理論に基づく感性情報処理モデルの提案	工学	産業創成工学専攻	知能機械システム学	村田 厚生
小川 貴史	Static and Dynamic Properties of Spherical Yukawa Clusters: Numerical Simulation and Theory (球状湯川クラスターの静的及び動的特性：数値シミュレーションと理論)	工学	産業創成工学専攻	電気電子機能開発学	東辻 浩夫
SYAHRUL	A study of Heat and Mass Transfer of Fluidized Bed for Drying of Moist Particles and Sorption of Sorbent Particles (流動層を用いた湿り粒子の乾燥および吸着剤粒子の吸着における熱・物質移動に関する研究)	工学	産業創成工学専攻	エネルギーシステム学	堀部 明彦
中島 耕太	計算機間の高速度データ転送制御の機構に関する研究	工学	産業創成工学専攻	計算機科学	谷口 秀夫
高田 裕輔	新規磁性半導体イルメナイト・ヘマタイト固溶体薄膜の研究開発	工学	機能分子化学専攻	材料機能化学	高田 潤
谷田 大輔	Molecular Recognition and Catalysis Driven by Hydrogen Bonding (水素結合駆動型の分子認識と触媒)	工学	機能分子化学専攻	物質反応化学	酒井 貴志
吉田 健太	Studies on RhCl <sub>3</sub> /amine-catalyzed Cyclization of Alkynes Leading to Multi-substituted Benzenes (塩化ロジウム/アミン触媒系を用いたアルキンの環化反応による多置換ベンゼン合成に関する研究)	工学	機能分子化学専攻	物質反応化学	田中 秀雄

吉田 友則	Studies on TEMPO-Mediated Electrooxidation of Amphiphilic Alcohols in O/W Nanoemulsion (O/Wナノエマルジョン中でのTEMPOをメディエーターとする両親媒性アルコールの電解酸化に関する研究)	工学	機能分子化学専攻	物質反応化学	田中 秀雄
中村 裕	Magnesium-Promoted Modifications of Pentafluoroethyl and Trifluoroacetyl Groups (ペンタフルオロエチルおよびトリフルオロアセチル基のマグネシウムによる化学変換)	工学	機能分子化学専攻	物質反応化学	酒井 貴志
細川 剛嗣	Preparation and Reactions of Pentafluoropropen-2-ol (ペンタフルオロプロペン-2-オール合成と反応)	工学	機能分子化学専攻	物質反応化学	酒井 貴志
岡澤 貴裕	Analysis of B cell selection in the germinal center reaction during a T-dependent antibody response at a single cell level (T細胞依存性抗体応答における単一細胞レベルでの胚中心B細胞選択機構の解析)	工学	機能分子化学専攻	生体機能設計学	大森 齋
勝瑞 哲也	Induction of In Vitro Apatite-Forming Ability for Implant Materials by Ultraviolet Irradiation (紫外線照射によるインプラント材料へのin vitroアパタイト形成能付与)	学術	機能分子化学専攻	医用生命工学	尾坂 明義
村田 等	Development of a protein transduction technology using polyethylenimine-cationization, and application to regulation of cellular function (ポリエチレンイミンカチオン化を用いたタンパク質細胞内導入技術の開発と細胞機能の人工制御への応用)	工学	機能分子化学専攻	医用生命工学	山田 秀徳
橋爪 敏浩	Studies on molecular targeting of ErbB2 with an artificial ligand (人工リガンドによるErbB2の分子標的的研究)	工学	機能分子化学専攻	医用生命工学	妹尾 昌治
横山 理英	Caを含浸させた植物系廃棄物を原料とした機能性炭化物に関する研究	工学	機能分子化学専攻	材料機能化学	高田 潤
浅野 拓司	Development of Nano-Structured Titania and Alumina Ceramics for Therapeutic Apheresis (ナノ微細構造を制御した血液浄化療法用チタニアおよびアルミナ微粒子の創製)	学術	機能分子化学専攻	医用生命工学	尾坂 明義
西野 直久	短繊維強化軽金属基複合材料の強度特性と複合界面に関する研究	工学	機能分子化学専攻	材料機能化学	高田 潤

授与月日：2008年3月25日

【論文博士】

氏名	論文題目名	専攻分野の名称	専攻名	大講座名	主査教員名
岡 隆之	Studies on the Target Proteins for the Therapy of Ocular Diseases (眼科疾患の治療のためのターゲットタンパクに関する研究)	工学	生体機能科学専攻	生体機能設計学	虎谷 哲夫

## [ 同窓会会計報告 (平成19年度) ]

## 一 般 会 計

## 収 支 計 算 書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I. 収入の部				
1. 入会金収入 会費収入	2,970,000	4,357,480	△1,387,480	440名 { @9,940×50 @9,920×10 @9,900×344 @9,880×36
2. 寄附金収入 寄附金収入	0	23,540	△23,540	名簿発刊事業：5名 12口
3. 雑収入 受取利息	120,000	115,236	4,764	普通、郵貯、有価証券
4. 同窓会名簿代 同窓会名簿代	0	9,500	△9,500	2冊 (送料500円含む)
当期収入合計(A)	3,090,000	4,505,756	△1,415,756	
前期繰越収支差額	4,632,418	4,632,418	0	
収入合計(B)	7,722,418	9,138,174	△1,415,756	
II. 支出の部				
1. 事業費	2,198,400	2,071,971	126,429	
通信運搬費	881,000	881,925	△925	会報、入会案内外郵送料
会議費	150,000	110,592	39,408	学科連絡委員会
印刷製本費	987,400	1,012,987	△25,587	会報、入会案内、封筒外
助成金支出	100,000	0	100,000	
消耗品費	10,000	6,107	3,893	
同窓会活性化経費	60,000	60,000	0	ホームページ作業料
雑費	10,000	360	9,640	
2. 学科事業費 学科配分会費	450,000	612,000	△162,000	408名 @1,500-
3. 管理費	460,000	460,000	0	
業務委託費	360,000	360,000	0	(財)岡山工学振興会
岡山大学同窓会会費	100,000	100,000	0	
4. 工学部創立45周年記念事業費	△759,500	△515,000	△244,500	
当期支出合計(C)	2,348,900	2,628,971	△280,071	
当期収支差額(A)-(C)	741,100	1,876,785	△1,135,685	
次期繰越収支差額(B)-(C)	5,373,518	6,509,203	△1,135,685	

## 基金特別会計

## 収 支 計 算 書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

(単位：円)

科 目	決 算 額	備 考
I. 収入の部		
1. 雑収入 受取利息	163,604	有価証券
当期収入合計(A)	163,604	
前期繰越収支差額	2,927,392	
収入合計(B)	3,090,996	
当期支出合計(C)	0	
当期収支差額(A)-(C)	163,604	
次期繰越収支差額(B)-(C)	3,090,996	

## 電気工学科第2期（昭和42年卒業）同期会 今秋開催

幹事：中村誠一、加藤珪一

電気工学科第2期生は毎年実施している同期会を本年は10月21日、22日、23日（この日はオプション）に九州湯布院で開催します。

同期生全員の住所は把握できているので、事前の打ち合わせはメールなどで行い、九州で楽しい会合ができることを期待しています。

我が同期は10年ほど前から毎年同期会を開催しています。卒業生を地区別に「関東組」、「関西組」、「岡山組」と分けて、分担して企画運営をしています。

今回は岡山組の担当で九州での開催となりました。開催10ヶ月ほど前から担当の地区の人が何回か集まり企画検討その後の懇親会と開催までも結構楽しいひとときを過ごしています。

なお電気電子工学科同窓会では同期会などの開催補助を行っています。宴会に足しにもなりますのでぜひ積極的にご参加下さい。

開催後の報告をお楽しみに。

### 電気電子工学科同窓会の 開催補助金について

平成20年9月10日再度掲載  
岡山大学工学部 電気電子工学科  
代表 加藤珪一 高橋則雄

1. 趣旨：学科同窓会活動を活発にするため、電気工学科同窓会会費の繰越金を用いて、電気電子工学科同窓会、同期会開催の資金支援を行うこと。（19年9月から運用開始）
2. 支援額  
同期会：構成人数の50%以上が参加の場合5万円、30%以上参加で3万円、30%未満は支援無し（電気電子工学科以外の同窓生が参加しても良いが、基本構成員を基準に補助する）  
各地区などの同窓会：構成人数の10%以上参加の場合5万円、5%以上参加で3万円、5%未満の場合は支援無し（電気電子工学科以外の同窓生が参加しても良いが、基本構成員を基準に補助する）
3. 支援金申請方法  
事前に計画書などを同窓会事務局に送付することで開催補助金を申請し同期会、同窓会終了後に参加者名簿などとともに正式申請を同窓会事務局に行う同窓会事務局より開催補助金を交付する。
4. 開催補助金の支給開始時期  
19年10月1日以降に実施する同窓会、同期会から適用する。  
事前に同窓会事務局に計画書を提出することを原則とするが、**周知期間を見て当面事後申請でも受け付けるが、開催後6ヶ月以上経過したものは支給しない。**
5. 終了報告への添付資料  
スナップ写真など 数枚 同窓会ホームページ掲載用  
参加者などのメールアドレス：当事者の了解を得て参加者（可能なら不参加者）のメールアドレスを同窓会事務局に送ってもらい、今後同窓会活動に関するメルマガ配布の基礎データとする。

2007年7月14日（土）に、大崎紘一先生が主に関係します研究室で組織しました生産システム学研究室同門会第1回総会・懇親会が開催されました。

詳細につきましては以下のHPをご覧ください。

<http://iims.sys.okayama-u.ac.jp/fsim/event/2007/2007meeting.html>

第2回は2009年7月上旬に開催予定となっております。

**工学部同窓会ホームページ** <http://www.eng.okayama-u.ac.jp/alumni/index.html>

工学部同窓会ではホームページを通じてみなさまにいろいろな情報をおとどけします。  
今年は、同窓生によるエッセイの連載や写真いっぱいの紀行、国際会議の様子の記事などを寄稿いただいています。  
是非ご覧ください。

ホームページを充実させるためにみなさまからの情報を募集しています。是非ご協力下さい。

例えばこんな情報を募集しています。

- ・同期会、研究室同窓会、など行事のお知らせ
- ・みなさまの近況
- ・同窓生の方がお持ちのホームページ（リンクさせていただきます）
- ・同窓生による寄稿（エッセイ、旅行記、写真などなんでも構いません）

ホームページへのご寄稿、ご要望などはofst@cc.okayama-u.ac.jp宛にお願いします。

**同窓会事務局より****同窓会報への寄稿などのお願い**

会員の方々の寄稿、意見等をお寄せくださいますようお願いいたします。

- 職場報告：600～1200字程度
- 会員グループ報告：600～1200字程度
- 最近の研究から：8000字まで（図・表を含む）
- 会員短信：800字以内（近況、随想、会員や恩師への祝辞、思い出等）
- 通信：400字以内

いずれも写真（顔写真あるいは関連写真）を合わせてご提供ください。

なお、いずれの寄稿につきましても、編集幹事一同の判断により、紙面の都合上内容を損なわない範囲で一部を変更、削除させていただくこと、また極端に内容が不都合であるものについては掲載をしないこと、などをさせていただくことがありますので御了承をお願いいたします。

**支部活動の助成について**

次のとおり支部活動を助成します。幹事、あるいは岡山工学振興会内・岡山大学工学部同窓会（086-255-8311）へ御連絡ください。

- (1) 100人程度を超えるような支部が総会、懇親会等の活動を行う場合に助成する。
- (2) 通信連絡に必要な経費として180円／人・回を助成する。
- (3) 懇親会等の会合に要する経費として50,000円／会を助成する。

**編集後記**

同窓会報20号をお届けいたします。本年3月付けで機械工学科・鷺尾誠一先生、喜多義範先生、石井忠男先生、環境理工学部・竹宮宏和先生（土木工学科から転出）、坪井貞夫先生（精密応用化学科から転出）がご退職されました。また、稲葉英男先生が副学長の任期を満了されご退職されました。先生方の長年にわたるご指導、ご功績に対し、心から敬意と謝意を表しますとともに、今後一層のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。ご退職された先生方にはご多忙中にもかかわらず本会報にご寄稿頂きましたことを改めてお礼申し上げます。また、鷺尾先生、石井先生、田中先生、稲葉先生に対する思い出をお寄せ頂きました高橋智先生、柳瀬真一郎先生、永井伊作先生、堀部明彦先生にも感謝申し上げます。

本年度の学科紹介は物質応用化学科ならびに電気電子工学科にお願いし、職場紹介は生物機能工学科、システム工学科の卒業生からご報告頂きました。巻頭言をご執筆頂いた野木茂次工学科長をはじめ、原稿執筆をご快諾頂きました酒井貴志先生、上浦洋一先生、藪田武司氏（日本板硝子株式会社）、山本裕司氏（ナブテスコ株式会社）に感謝申し上げます。

なお、同窓会ホームページには同窓会報のバックナンバーや同窓生から寄稿頂いた記事などが記載されています。会員の皆様の情報発信の場として是非ともご活用ください。

学内代表幹事・佐々木大輔（システム工学科）